＝友弾＝「内外の動きと日本の世相」の掲載を終わるにあたって。

映画「男たちの大和」が封切られたのは昨年１２月１７日であった。

日本の別名「大和」を艦名にもち、世界最大最強といわれた不沈戦艦の決死の特別攻撃と、それにまつわる美しき慕情と切ない別離、そして生死一如を悟った戦艦大和総員２７４０名の世界調和への切なる願いが鮮やかに描かれていた。大東亜戦争終焉から６０年、紀元２６６６年、ややもすると忘れがちになってしまった大和魂を見事に描いたと絶賛したい。

沖縄への海上特攻を敢行した日本。なぜ特攻をしたのか…いや負けるとわかっていた戦争になぜ突入したのか。その時までに我国が置かれてきた状況を概要的に追ってみたい。そしてこれを機に日本魂をもう一度見つめ、姿勢を正して皇居を遥拝し、靖國神社に掌を合わせたい。

お釈迦様がヒンズー教を基本に、王道からの慈悲の念を説いた仏教…それは皇國日本固有の神道にも相通じ布教され今日に至っている。ご承知の通り徳川家康は世界侵略・分割の陰謀をもつ西欧の無礼きわまる利己主義志向を喝破し鎖国政策をとった。また、人の心情の隙間に入り込むキリシタンを断断固拒絶。これにより徳川幕府は、永年かけて培われてきた和魂の発達育成を大事にし、もって国内を平定した。いいかえれば生命無窮のなかで最高道徳を探求する位置に象徴としていただいている皇（すめらぎ）、それを中心とした国体の護持をさらに強固に確立したのである。爾後二百数十年、日本国内は戦を止め泰平の世であったのである。しかし幕府はあまりの内政平穏から、政治の延長線上にある兵法研究を疎（おろそ）かにしてしまった。

幕末のころまでには、欧米は力により北極、南極、皇國日本を残して太平洋の島々に至るまでの地球上全てを侵略し、分割を終えていた。

ヒトとして進化の途中にある有色人種の国や地域は、力によって従属させるしかない…我々の言う事を聞けば、かえって文明の恩恵を受ける事が出来るのだから感謝してもらいたい。解放してあげるのだから、各種興業による利益は自国に持ち帰るが、協力の度合いによっては利潤の分配もする。我々に進んで協力した者は金持ちにもなれるし、心も豊になるだろうから、こんな善なる行為はない…と欧米人は本気で考えていたのである。白色人種は優秀民族で、有色人種は劣等民族であるという考え方は、皇国日本や、有色人種の国の一部有識者には全く無かったが、それ以外ではごく自然な形であたりまえに信じられていたのも残念だが事実である。

食指を日本に向けた欧米列強。特に米国は浦賀、江戸湾において艦載砲の空砲射撃による威圧を始めるなどにおよんだか、幕府は成す術が無く、その後、大政を奉還する。

明治維新政府は、徳川時代に莫大な富を蓄えた商人からの融通を支えに非常時国家態勢を整え、元寇にもまさる神國日本最大の危機を戦わずに乗り越えた事に一息はついた。しかし独立を存続するには日清、日露の両戦役を経て、さらに洋才をもって富国強兵策をとらざるを得なかったのである。やはり限界の時は来た。政府の年間予算の大部をゞる軍事費の継続による貧困層の増大。洋魂洋才にかぶれて文化人を名乗る輩の傲慢。また、貧困ゆえ日本全体にも広まってきた赤化思想による下克上をよしとする組織活動、それは 5.15、2.26 事件として一挙に噴出したのである。政府は時として打開策はとってきた。例を挙げれば租借地関東州や南米への移民奨励、欧米列強からの解放を企図する大東亜共栄圏建設の先駆けとしての韓国併合や五族協和を謳（うた）った満州帝国建設等々である。しかし後者のそれらは洋魂の域であり結果的には致命的な失策であったと言わざるを得ない。泥沼化した日支紛争、やがてルーズベルトは日本との戦争に入ることを決定し ABCD 包囲網を敷き経済封鎖にでた。それにより日本はさらに暗い時代へと追いやられることになるのだが。政府の一連の行詰りに対して、赤化思想グルが再び軍の一部を煽動し 2.26 よりも大規模な画策を実行に移すとの危惧も高まってはきた…つまり革命蜂起が水面下で微速ながらしかし着実に前進していたのである。

ルーズベルトの要求を呑めば戦争は避けられたとする説もあるが、それは甚だ甘いお人よしなお話しでしかない。なぜなら彼は日本の内政・外交がどうなろうと何が何でも開戦を誘起させ、しかる後の利害勘定を既に終えていたのである。この手法は超合理主義系の国のものであり、今日でもその言動に変化無しの現実を、我々は胆に命じておかなければならない。

余談であるが、昭和４３年に映画「猿の惑星」が日本でも放映されたが、それは白人種の傲慢な合理主義の行きつく先を暗示し、反省を促すものであったと記憶している。皮肉にも登場する猿は日本人をはじめとする有色人種の意味合いではあったのだが…。（元従軍記者ピエール・ブール原作）

米国を相手に戦えばまず絶対に勝算はない。戦わずして国滅ぶを待つか。それとも、日本いや大東亜の万世にかかわる一分（いちぶん）の義行にでるか。

欧米に鉄槌を加えるべく行動を起こしたのは昭和１６年１２月８日である。爾後半年間、南雲忠一中将率いる我機動艦隊は太平洋からインド洋を暴れまわり連戦連勝、陸軍も海軍に遅れをとらず連戦連勝であったことはご承知の通りである。

開戦前、山本五十六は「米国との戦争になれば海軍が主役である…半年や一年は存分に戦ってみせますが、その後は保証できません。」と近衛首相に言い切った。この発言を無責任ととる向きがあるが、決してそうではない。「国力の差からいって開戦後遅くとも１年で和平交渉・停戦として下されたい」と言わずも示唆したのであって、「その時の仕事は政府ですよ」と武人として言葉に出来えないための表現であったと見るべきである。

ミッドウェー海戦大敗北、ガダルカナル島攻防戦完敗と続き、昭和１８年４月１８日、連合艦隊司令長官山本五十六はボゥゲンビル島への無謀とも言える激励視察に出発したが、敵機 P38 の攻撃により乗機は撃墜され、戦死してしまった。これは、長官の躯をもっての戦の潮時を示す自決であったと…察しなければいけない。落ち行く乗機で長官の胸に去来したものは何であったか…この世に人間として現（うつ）し身をいただいたが、神の理想を実践する事が出来ず、その大罪をお詫びし、一度その肉体を奉還して幽の世界に帰り奉ず「一死以って大罪を謝し奉（たてまつ）る」…。「七生報国」。「八紘一宇」。「神州不滅を確信しつつ、天皇陛下万歳」。

紙面の都合上甚だ荒削りな文章に終始してしまったが、現役諸君には何かを感じ、ふるいたつものがあったならば筆者としては幸いである。

平成１８年１月　文責　太田寛道